

『はじまる。』第二章にて、齋藤守弘先生著『神々の発見』（講談社文庫 1997 年）について、解説しました。

その齋藤守弘先生ご本人から、“**自著の内幕を語る**”という一文が届きました。

先史文明のさまざまな謎を解く、重大な鍵を発見した、夜明けの書。それは、新しい男性と女性のあり方までをも、示唆する。

新しい学問を開拓するということの、いのちを賭けた、真剣な息吹き。とくに、未来をになう若い方がたには、この息吹きを、著者ご本人の文章から、ぜひ感じとっていただきたい。

齋藤守弘先生が発見した鍵を入手し、教養の封印を解こう。ちなみに、山田 学が父から継承した「TQ技術」を解明するためにも、これは、土台の作業です。

『神々の発見』は買ったお客さまが手放さないようで、古本屋にもあまり出ていないようです。JOMON あかでみい（商品陳列表の中味の欄）から**図書館**へ出張し（図書館サイトへ飛び）、お客さまの近くの図書館を調べてみてください。当世、こういう真剣な内容の本は、増刷されにくいのですが、お客さまの**新しい声**が高まれば増刷の可能性もあるでしょう。ご参考までに、「日本の古本屋」サイトは [www.kosho.or.jp](http://www.kosho.or.jp)

実際の本には「齋藤守弘」でなく「**蓋藤守弘**」と記してありますから、インターネットにも後者の漢字で登録してある可能性が高いです。

### 自著の内幕を語る

齋藤守弘

拙著はいったん出版を拒否された書である。幸い世界的ベストセラー『神々の指紋』（グラハム・ハンコック著）が日本でも大当たりし、拙著の一部が同書と重なることから、出版社の目にとまり文庫本の体裁で陽の目を見た。

解説者の直木賞作家高橋克彦氏により「これは名著である。必読の古典の高みに達した」と激賞され「本当はハードカバーで出版すべき」と編集者に告げられた、と私は聞いた。

ネットの読書評では「本物を超えた便乗出版」と長文の丁寧な感想が流れたが、前述のごとく内容的に決して便乗出版ではなかった。書名が『神々の...』と類似したための誤解であった。営業部からたつての注文で、ぜひその言葉を含めてくれとのこと。『神々の発見』の題名で両者は意見の一致を見た。

しかし、神々が発見したのか、神々を発見したのか、イメージがまいちの声もあった。著者としては後者の意味のもりである。

およそ十年間にわたり、いろいろの雑誌に書いたものを一書にまとめてあり、どこからでも読み易いが、そのため相互の関連性がかみにくい面もある。あるいは、そうした総合化、理論化は読者自身、各自が各自の知的好みに従い、自由に行うべき性質のものともいえようか。要するに**グローバルに未来を考え、人生を考える一つの有力なデータ**として、楽しみながら読んでもらえれば有り難いと、著者は願う次第。しいて言えば第十部「謎の盃状穴と神社の聖方位」及び第十一部「仁徳朝の異形賊・両面宿儺の実像」が本書のメインであり、発見した神々とは**女性神「極孔神」と男性神「月神」**である。それについて、その後の研究は04年国際縄文学協会で講演し、同協会機関誌「縄文ジャーナル」第五号に講演の要約を掲載した。これらの神々は**先史人類最初の至高神**であり、これらの至高男女神の発見なくして日本の**縄文文化**の謎は解けないし、いわんや数々の世界遺産となっている先史文明の解明も、依然、闇に閉ざれたままになる。

まだ二十一世紀は始ったばかり。二十世紀初頭のアインシュタインの相対性原理の発見（1905年）がその後の二十世紀科学の方向を決したと同じく、私の先史二大至高神の発見は二十一世紀の考古学を方向づけ、そして今世紀における**男性と女性の関係の在り方**にたいし、哲学、思想以上の根本的な変革を迫ることになる。

拙著はその夜明けを予告するにすぎない。

『神々の発見』が出版されたとき、神田の大書店の店頭で平積みになった山が、訪れる毎に低くなるのを見て、その旺盛な読者の知的消化力に、今さらながら驚かされた。

この方向を極めれば、いやでも世界の考古学の指導的地位に立つ。知的トップに立ちたいのであれば、この方向こそ近道だ。ただし、世の抵抗に打ち克たねばならないこと、天才ガリレオと同じ。